

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理

Monthly Bulletin Vol.27 No.2 February 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

CONTENTS

- ・巻頭言
構造主義で読む神話
／井上 昭洋 1
- ・文脈で読む「身上さとし」(23)
明治 23 年 1 月～3 月
／深谷 耕治 2
- ・英語文献にみる天理教 (14)
『Japan To-Day』(1)
／尾上 貴行 3
- ・音のちから—中国古代の人と音楽 (30)
文物が語る音の世界—リズムを刻む拍板—
／中 純子 4
- ・天理参考館から (40)
天理参考館第 100 回企画展「教祖 140 年祭記念 幕末明治の暮らし」①
／幡鎌 真理 5
- ・ブラジルの宗教的風景 (10)
アンテベラム期の米国系プロテス釈ト教会による布教活動④
／中西 光一 6
- ・2025 年度公開教学講座：「元の理」の学術的研究とその新しい展開を求めて (8)
第 8 講：「元の理」と「こふき」
／岡田 正彦 7
- ・おやさと研究所ニュース 8
第 383 回研究報告会 (12 月 22 日)
／2025 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

構造主義で読む神話

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

神話についての文化人類学的研究には、伝播主義と構造主義という 2 つの大きなパラダイムがある。そのことは 2025 年 8 月号の巻頭言でも言及し、壮大な人類史レベルで神話の伝播について語る新たな比較神話学の理論について紹介した。ただし、伝播主義のパラダイムに属する神話学は、どんなに目新しい装備 (DNA 解析によるホモ・サピエンスの移動についての理論) を備えても、伝播 (どこからどこへ伝わったのか) という歴史的因果関係で類似性を説明することになる。

一方、レヴィ=ストロースの構造人類学は、神話の類似性・共通性は人間の思考様式の普遍性 (psychic unity) によるものとし、神話を一つの記号体系として分析し、その構造を明らかにしようとする。よって、伝播論に基づく比較神話学と比べても、単一の神話の精緻な分析に適している。また、分析対象は一つの神話ではなく、複数の神話からなる神話群であり、伝播論的神話学とは異なった方法で神話を比較する。その際に重要なのが、二項対立や変換といった概念だ。二項対立とは、相互に規定し合う対立項目の関係のことである。たとえば「生」は「死」があって初めて意味を持つが、この「生」と「死」が二項対立になる。

もう一つの重要な概念である変換とは、登場人物やその役割、出来事の順序を入れ替えて根本的なテーマが保たれる、そうした入れ替え操作を指す。レヴィ=ストロースのいう (神話) の構造とは、この変換されても不变である根本的な関係性の枠組みのことである。変換と構造の説明でよく使われる事例が、指の形で勝ち負けを決めるジャンケンだ。最もポピュラーなのはグー・チョキ・パーだが、ジャンケンには様々な種類がある。日本なら古来、虫拳 (蛇・蛙・ナメクジ) や狐拳 (庄屋・獵師・狐) があり、インドネシアのジャンケンなら、象・人・アリを使う。ナメクジの粘液は蛇を弱らせ

るからナメクジの勝ち、狐は庄屋を化かすから狐の勝ち、アリは象の耳の中に入つて困らせるからアリの勝ち、というように理由づけはされる。だが、重要なのはそのような表層の語りではなく、要素が置換されても変わることのない三すくみの構造である。こうした様々な種類のジャンケンの集合体が神話群にあたり、個々のジャンケンがその神話群に属する神話と考えればよい。ところで、昔話や伝説には、人間と人間以外の存在 (動物、精霊、神など) が結婚したり、男女の関係になったりする異類婚姻譚と呼ばれるジャンルがある。浦島太郎、かぐや姫、鶴の恩返し、羽衣伝説などが思い浮かぶだろう。いずれも、人間の男性と異界 (もしくは動物) の女性の出会いと別れについての物語であり、これが異類婚姻譚という神話群の不变の構造になる。そして、それぞれを読み解くとこれらの物語は変換関係にあることが見えてくる。たとえば、亀を助けた浦島太郎は竜宮城に行き乙姫にもてなされるが、望郷の念から人間界に戻ることで、彼女と別れる。罪を犯したかぐや姫は月から人間界に下ろされるが、捷に従って人間界を去ることで、帝と別れることになる。主人公が異界と人間界の境界線を越える理由、異界と現世の位置関係、主人公がもといた世界に戻る理由など、逆転していることが分かる。

神話を神話素 (『誰が何をした』といった最小の叙述単位) に解体して、神話の構造を読み解くレヴィ=ストロースの神話分析は、真似をすることができない名人芸だ。だが、彼の神話分析に学ぶ点は多く、構造主義的な視点で神話のテクストにアプローチすることで見えてくることもあるだろう。男神と女神の交わりにより世界や人間が誕生するという創世神話について考えてみるのも面白いかもしない。『古事記』のイザナギとイザナミによる国産みの物語を分析し、その変換関係にある神話を探していくこともできる。

明治23年1月～3月

天理大学人文学部講師
深谷 耕治 Koji Fukaya

増野正兵衛一家は、明治22年の大みそかに神戸を引き払って、年明けすぐにおぢばに伏せ込むようになる。妻いとは結婚15年の懷妊で、妊娠8カ月であった。「おさしづ」の割書きを見ると、おぢば到着後も、正兵衛やいとには度々身の障りがあり、また、2月13日に生まれた長男・道興もお乳を戻したり、夜泣きがあつたりしたようである。明治23年1月～3月の「おさしづ」からその頃の状況をみていきたい。

- ・明治23年1月6日：増野正兵衛及妻、母身上障り伺（増野正兵衛十二月三十一日おぢばへ引越す途中、いと妊娠八箇月なるに、龍田の坂にて人力車転覆致せしも御蔭を以て怪我無し、その落ちた日の翌一月一日より母の身上、いとの身上に障り、又正兵衛の身上にも障りに付伺）
- ・1月13日：増野正兵衛腹痛下り咳出で障りに付伺
- ・1月24日：増野正兵衛身上の居所昨日より、大便の後に血が下り、本日又左の奥歯少し痛むに付伺
- ・1月26日：増野いと左の腹骨の痛みに付伺
- ・2月16日：増野正兵衛食物を上げ、右の足のきびす痛み、道興夜々泣き、乳を戻すに付伺
- ・2月28日：隣家地所買入急にする方宣しきや、暫時見合わす方宣しきや、増野正兵衛伺
- ・同日：増野いと産後下りもの及道興夜々泣くに付伺
- ・3月4日：増野正兵衛、先日小人障り、又家内障りによって、日々取扱いの事を御聞かせ蒙り、いかなる取扱いにてありますや、色々考えますれど分かり難きに付、押して伺
- ・3月17日：増野正兵衛毎朝腹痛み下るに付願
- ・3月21日：増野正兵衛小人道興夜々泣き、又乳を戻すに付願／同日、辯井伊三郎の前のおさしづの前々伺のおさしづを増野正兵衛見て後に、前のおさしづを見るよう、目が霞むに付願

明治23年1月6日、正兵衛、妻いと、母（おそらく春野ゆう）の身の障りについて伺っているが、特にいとは、おぢばに引っ越す道中、妊娠8カ月の身重にもかかわらず、龍田の坂に乗っていた人力車が転覆したようである。幸いにして「御蔭を以て怪我無し」だったが、それから何らかの身の障りになった。「夫婦々々一つ聞き、よくへへの理を思え。これまでの事情思えども、今まで世上分からぬ。判然に思われん。一年経ち、又一年経ち、世上鮮やかという、治まるという。」と、まずはそれぞれの病いを「夫婦」のこととして捉えて、これまでのような世間的な考えではなく、1年ずつでも理の思案をすることを促されている。また、「夜分々々咳く処、よう諭してやつてくれ。」とその後の夜泣きを示唆したお言葉もみられる。

13日には、正兵衛の「腹痛下り咳出で障り」について伺うと「年限の事情、どういう事も道と言う、年々の理である。」と「年限の理」について述べて「案じることはない」と諭されている。しかし、病は治まらず、10日後の24日には「大便の後に血が下り、本日又左の奥歯少し痛むに付」伺っている。「日々の理、中の中一つの理どういう事である。一つ放って置かんという。一手一つ日々に治める。」と、日常生活のなかで内を治めることの大切さを説いたお言葉が見受けられる。

26日には、妻いとの「左の腹骨の痛みに付」伺うと、「日々という、

先ず一つの楽しみ、一つの心一条何かの事情、何にも案じる事は要らん。」と、子どもの誕生という「楽しみ」について述べられている。

2月13日に、道興が誕生した。その3日後の16日に、正兵衛が「食物を上げ、右の足のきびす痛み」という身の障りと、道興の「夜々泣き、乳を戻すに付」伺っている。「難儀さそう、不自由さそうとは話せん。いかなる理を聞き分け。不思議見る、聞く、始まる。どんな道も登らにやならん。いんねんの理を定め。一日の日という。」と、「いんねんの理」を聞き分けて、「不思議」を見聞きする中に、心を定めることを促されている。

28日に「隣家地所買入急にする方宣しきや、暫時見合わす方宣しきや」と伺うと「前々あたゑを以て、一つ何か事情暫くそのまゝ。」と、与えがある中で、今は見合わすことを指示されている。同日、妻いとの「産後下りもの」と道興の「夜々泣くに付」伺うと、「どんな談示するなれど、神一条計り難い。世界も内も一つ理という。」と、世間と内を区別することのない神一条の通り方を諭し、「神の諭し、神の理を諭して、日々取り扱いといふ。」と伝えられている。このお言葉を受けて、正兵衛は思案を巡らせたが、はっきりとは神意が分からず、3月4日に改めて「日々取扱い」について伺うと、「十分日々の処、随分秘そやかついへへの理が現われる。よう暫くの処秘そとす。取扱い十分諭す。」というお言葉があった。しばらくは「秘そやか」に治めておくことの「取扱い」についてであろうか。「世界の道難しいてならん。」ともあり、何か慎重な取扱いが求められる事案があったのだと推察される。

3月17日に、正兵衛が「毎朝腹痛み下るに付」伺うと、「一日の日事情、小人並大抵の事でない。一人のあたゑなかへ。二人夫婦その中一つ、二人夫婦可愛い一つの理、頼もし一つの理、心一つを定め。」と、子どものことに関して、夫婦の理について諭されている。その上で、4日後の21日、道興の「夜々泣き、又乳を戻すに付」伺うと、「一つへ理を洗い、一つの理を聞き、運ぶ一つ尽す一つ、前々事情諭す中、いかなるも成程の理を定めみよ。」と「成程の理」について諭されている。

乳（乳房）

『身上さとし』の中で、深谷忠政は2月16日の「おさしづ」について「天の摂理というものを心に案じているが、さとしが第一大切であるから、よくさとしきることが肝要である」や「どんな道中も通らねばならないが、因縁を自覚して通れ。今はまことに大切な時期である。という意味で、乳を戻すのは、天の摂理を十分に治めよ。ということを指示されたのであろう」と述べ、また3月21日のお言葉に関しては「前々から事情をさとしているのだから、どんな中でも、なるほどという理を定めてみよ。という意味で、乳を戻すのは、理⁽¹⁾をよく治めよ。ということを指示されたのであろう」と説いている。

増野家の文脈で考えると、子どもの身の障りや夜泣きを通して、お屋敷内での何らかの「日々取り扱い」について諭されていることが印象的である。また、正兵衛の身上についても「夫婦の理」が説かれたりしており、身上・事情の現れ方は異なるが、伝えられる神意は重なっていることが分かる。

〔註〕

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、86頁。

『Japan To-Day』（1）

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 *Takayuki Onoue*

本連載では、英語文献にみる天理教をテーマとして、これまで天理教外の外国人によって書かれた天理教に関する学術論文や新聞記事などを見てきた。今回は、天理教外の日本人による英文での天理教紹介を見ていきたい。取り上げるのは、Kotaro Mochizuki『Japan To-Day: A Souvenir of the Anglo-Japanese Exhibition held in London 1910.』(Tokyo: The Liberal News Agency, 1910)である。この書籍のなかで、天理教は神道の一派として紹介されている。

まずこの著者である望月小太郎（1866～1927、政治家、弁護士、ジャーナリスト）について見ておきたい。望月は留学したイギリスで法律を学び、バリスト（法廷弁護士）の資格を得るとともに、経済や歴史も学んだ。帰国後は政治活動を開始し、明治後半から大正期にかけて、海外事情に精通し卓越した弁舌をもつ衆議院議員として、特に外交関係で活躍。また明治42年（1909）に英文通信社を設立し、日本の情報を海外へ、また海外の情報を日本へ発信した。彼が執筆や編集した書物は20冊近く、その約半数は英文であった。その内容の多くは、日本の実情の紹介と諸外国における日本評である。代表作として、『世界に於ける明治天皇』⁽²⁾とその縮小版『世界評論明治大帝と我国民性』、また今回紹介する『Japan To-Day: A Souvenir of the Anglo-Japanese Exhibition held in London 1910.』(以下、『Japan To-Day』〔現時の日本〕と記す)などが挙げられる。

『Japan To-Day』（現時の日本）は、1910年にロンドンで開催された日英博覧会に合わせ、日本を紹介する英語書籍として作成されたもので、その高い評価により宮内庁から下賜金を受けている。日英博覧会は、日本政府と英国の博覧会会社の共催で1910年の5月から10月にかけてロンドン西部のシェパーズ・ブッシュで開催された。開催期間中、800万人を超える来場者があったとされる。開催の主な目的は、1902年に締結した日英同盟の強化、欧州への日本の先進性顯示、貿易振興・輸出増大による国富増加などであった。日本の美術品や建築模型などが多く展示され、また台湾、満州などの植民地経営についての展示も行われた。この博覧会は好評を博したとされるが、その一方で台湾やアイヌの村落展示が「人間動物園」的であったとの批判もあった。⁽³⁾

この『Japan To-Day』（現時の日本）の「序文」で、望月は出版の目的と経緯に言及している。まず、1904年から1905年の日露戦争によって日本の存在は広く世界に知られ、国際社会で注目されるようになったため、欧米の人々は日本の政治、経済、社会、そして文化などに興味を寄せるようになったが、日本の本当の姿についてはまだ十分に知られていない、と述べている。そして、欧米の歴史家たちによれば、欧米諸国において文明は、ルネッサンス、宗教改革、政治改革、物質文明の進歩、貿易の発展、そして国際競争といった事柄を経て、各国ともほぼ同じ過程をたどり、現在の発展に至ったとする。一方、日本の文明の発展の仕方はこれらの欧米諸国とは異なっており、日本へは東西のさまざまな文明の要素がそれぞれ異なる時期に、そして多様な経路と形態をもって流入してきたのであり、日本は日本人特有の精神によってこれらを融合してきたの

であると主張する。そして、日本は古代アジアや近代西洋など世界のさまざまな文明を日本の文明に巧みに吸収してきたのであり、しかもそれは単に流行を追い求めたものではなく、絶妙な組み合わせとなっていると述べる。そのため、今日の日本を正しく理解し、その文明の本質を探究するためには、このような日本文明の形成の歴史を詳細にたどる必要があると主張したのである。

こうした考えに至ったのは、望月が8年間イギリスに留学したことが大きく影響しているようである。『Japan To-Day』（現時の日本）の「序文」では、上記に引き続き、イギリスから帰国した後のことについて、

自国の実情を世界に説明することが私の責務であると常に感じ、何年もの間、政治、経済、文学などの研究に専念してきた。1906年には英文日刊紙『Liberal News Agency』と英文月刊ジャーナル『The Japan Financial and Economic Monthly』を創刊し、昨年は『Japan and America』という書籍を出版した。機会あるごとに日本を諸外国へ紹介することが、私にとって最も喜ばしい義務の一つである、と常々感じてきた。そして、出版物を通して日本文明の概略を世界に紹介することは双方にとって有益であるとの信念のもと、日英博覧会という素晴らしい機会を利用して、本書『Japan To-Day』を出版するに至った。（原文は英語。日本語は筆者訳）

と述べている。

〔註〕

- (1) 望月小太郎に関しては、次の論文を参考にした。末木孝典「戦前期「外交通」議員の出現：望月小太郎の生涯と活動」『法學研究：法律・政治・社会』Vol.92, No.7 (2019年7月) 71～101頁。同「戦前期「外交通」議員と新外交：望月小太郎の外交論を中心に」『法學研究：法律・政治・社会』Vol.95, No.4 (2022年4月) 49～79頁。
- (2) この『世界に於ける明治天皇』は、「世界の人々が明治天皇にどのような印象を抱いたのかを国民に紹介したい一心から、二十余カ国新聞雑誌を収集翻訳した大著」（明治神宮ホームページ「世界のなかの明治神宮」<https://www.meiji-jingu.or.jp/goitsuwa/?id=1749453570-539255> 2026年1月3日閲覧）とされる。英語版のタイトルは『The late Emperor of Japan as a World Monarch: Presented to Their Imperial Majesties, the Emperor, Empress, and Dowager Empress as well as to the other members of the Imperial Family On the occasion of the first anniversary of the late Emperor's decease July 30, 1913』(Tokyo: Liberal News Agency, 1913)。
- (3) 日英博覧会に関しては、次の書籍と論文を参考にした。倉田喜弘『1885年ロンドン日本人村』（朝日新聞社、1983年）、小山騰『ロンドン日本人村を作った男：謎の興行師タナカ一・ブヒクロサン 1839-94』（藤原書店、2015年）、楠本町子「日英博覧会と明治政府の外交戦略」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科編』第38号、2013年3月：41～56頁。

文物が語る音の世界—リズムを刻む拍板—

天理大学国際学部教授
中 純子 Junko Naka

リズムを刻む楽器として、中国音楽に欠かせないものの一つに拍板がある。それは、複数の板を紐で結びあわせた楽器で、外側の2枚の板をもって中の板を挟み合わせるように打って音を出す。瀧遼一『中国音楽再発見 楽器篇』（第一書房、1991年、59頁）には、「現今、演劇、葬式および街道芸人もこれを使う」と

ある。1904年生まれで、1938年に旧満州へ調査に行かれた瀧氏が「現今」といわれるのは、中華民国時期の中国のことであろう。しかし現在でも拍板は左図のように京劇でも主要な打楽器（徐城北『見て読む中国 京劇の世界』（東方書店、2006年、60頁）である。では、拍板はいつごろから用いられていたのだろうか。

唐代の拍板

文献を見てみると、拍板が楽器として確かに使われるのは唐代からようだ。唐代の音楽書『楽府雜錄』には、「拍板」の条があり、玄宗に付き従う戯言を得意とした俳優の黃幡綽と、玄宗とのやりとりのなかに以下のようにみえる。

拍板にはもともと楽譜はなかった。玄宗は黃幡綽に命じて楽譜を造らせた。黃幡綽はなんと紙に二つの耳を書いてそれを献上した。玄宗がそのわけを尋ねると、「ただ耳がしっかりとすれば、リズムを誤ることはないのです」と答えた。

唐代中期には、拍板という打楽器が、リズムを刻むために用いられていたことは明白である。

唐代の音楽が記された『通典』卷146 楽6には、「散楽」の説明に「横笛一、拍板一、腰鼓三」を使うとある。注目されるのは、メロディ楽器が横笛一管であるのに対して、リズム楽器が拍板一揃えと腰鼓が三張りという、打楽器を中心とした構成であったことである。この「散楽」とは、遊興のための芸能で、『通典』では「だいたい散楽雜戯には幻術が多く、幻術はすべて西域由来のものが多い」との説明がある。その幻術とは、手足を切断したり、内臓を取り出したり、鋭利な剣のうえで踊ったりと、さながらいまの手品やサーカスまがいのものであった。そのなかに用いられた拍板は、腰鼓とともに、そのスリリングな演技を盛りあげる役割を果たしていたであろう。そのつくりについても、『通典』卷144 楽4に、10枚あまりの木を重ねて革で連ね、それを擊つことでリズムを刻むとの説明もある。

唐詩に詠われた拍板

朱湾「詠拍板」（『全唐詩』卷306）

赴節心長在	赴節 心 長に在り
從縛道可觀	從縛 道 観るべし
須知片木用	須らく片木の用を知るべし
莫向散材看	散材に看る莫かれ
空為歌偏苦	空しく為せば 歌偏に苦しく
仍愁和即難	仍りて愁う 和すること即ち難きを
既能親掌握	既に能く 親から掌握す
願得接同歡	願わくは同歡に接するを得ん

ただ単にサーカスを盛り上げるためだけの楽器であれば、中唐詩人朱湾によって取り上げられることもないであろう。「赴節」という冒頭のことばに、リズムを刻む楽器として中唐にすでに認識されていたことが次のようにうかがえる。拍板を「散材」つまり役に立たない木切れと見なすことのないように。それをむだに打てば、合わせて歌うのがとても苦しい、それで拍板の拍子と歌が和することが困難ではないかと心配する。しかしすでに拍板をマスターしている私は、宴にある人々と享楽をともにしたいと思う。そのように詠じられている。

そういうえば、敦煌莫高窟の壁画のなかに、「拍板」が多く表われてくるのは、中唐以降のようである。拍板が20以上描かれている窟としては、莫高窟の中唐制作の231窟・晚唐制作の138窟・五代制作の146窟などであり、初唐以前の窟には基本的に描かれていよいである（『敦煌樂舞大典』上海音楽出版社、2022年）。これも「拍板」が中唐ころから用いられるようになっていくことを傍証している。

五代の王建墓の楽人レリーフ

五代の前蜀の王建（847～918）の墓石の棺床部の周囲に施された楽人のレリーフがある。高さは84cm、長さは7m 54cmで、南面に4体、東西両面に10体ずつの計24体からなる。南面に、拍板奏者1名と舞人2名と琵琶奏者1名と、舞人を挟んで琵琶と拍板という構成で目立つ場所に据えられている。東面10体の



樂伎のうち、都暉鼓・鼓・腰鼓・拍板・羯鼓・鶴鳴鼓と鼓（1名で担当）・答臘鼓・毛員鼓と8体が、西面10体の樂伎のうち、羯鼓・銅鉦と2体が打楽器奏者である。つまりは24体のうち11体、半分弱が打楽器奏者ということになる。なかで拍板と羯鼓だけは2体あり、拍板は、他の打楽器とは別扱いともいえよう（『中国音楽史図鑑』人民音楽出版社、1988年、92～96頁参照）。

宋代の拍板

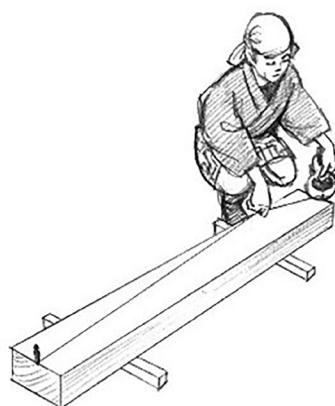
先の瀧遼一『中国音楽再発見 楽器篇』には、拍板は「宋の時代に最も重視された楽器である。拍子を取るために用いる」とある。宋代は曲に合わせて歌詞をつくる文学的営みが文人士大夫の間に浸透した。そのため、簡便にリズムを取る拍板が重宝されたのかもしれない。拍板を手にして歌唱するといった記載が散見する。宮廷のなかで宴饗音樂を司る教坊でも、拍板は重要な打楽器として位置づけられていた。北宋の都開封の繁栄を記した孟元老『東京夢華錄』卷9によると、10月12日には、宰相・執政・親王・皇族・百官が祝賀の礼のために参内する。その儀礼には、大遼・高麗・西夏の祝賀使節も殿上に着座し、それぞれのテーブルの前にはご馳走がならべられる。装束を身に着けた教坊の樂部は、舞台の下の色絹で飾った場にいならんでいる。その最前列に拍板十揃いが一列にならび、つぎに琵琶が五十面ならぶ。それは舞や雜技や雜劇の伴奏を行なうためなのである。五代の王建墓のレリーフにあった琵琶と拍板は、北宋の宮廷宴饗音樂においてもメロディとリズムの主軸であった。

天理参考館第100回企画展「教祖140年祭記念 幕末明治の暮らし」①

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

「天理参考館から」と題して、参考館（以下、当館）が所蔵する資料にまつわる事柄を綴ってまいりました本シリーズも、おかげさまで40回を迎えました。昭和5年（1930）に中山正善天理教2代真柱によって創設された当館は、世界各地の生活文化への理解を深めるために、95年の歳月を経て、古今東西の民俗資料、考古美術資料を収集、保存、展示してまいりました。昭和62年（1987）から始動した、収蔵品のなかからテーマを立てて展示を行う「企画展」も、1月5日に開幕した「教祖140年祭記念 幕末明治の暮らし」展（以下、本展）で100回を迎えることになりました。教祖140年祭の本年、令和8年（2026）初頭に、記念すべき第100回企画展として本展を開催する次第です。これを区切りとして、次号をもちましてこのシリーズを終了する運びとなりました。長い間のご厚情、誠にありがとうございました。

本展では教祖のご誕生から明治20年までの間を時代設定にし、その頃に使用されていた様々な生活道具や、その時代の雰囲気を色濃く反映した文物を3つの章に分けて紹介します。まず第1章は「イラストから見る暮らし」、続いて第2章は「モノから見る暮らし」、最後の第3章では「おやさまと年祭」と題して展開しています。教祖140年祭特別展示「おやさま」とは異なり、教祖ゆかりの品々はありません。しかし、『稿本天理教教祖伝』に出てくるモノの実物資料や、教祖の道すがらに関係する道具類、「みかぐらうた」

図1 墨壺 奈良 明治～大正
(天理参考館蔵品)図2 墨付けの様子
(イラストは天理教道友社提供)

や「おふでさき」に登場する用語にまつわる生活道具などを展示しています。

例えば、「おてふり」で大工仕事に関係する動きがしばしば登場します。「ふしん」は手斧を振って木材を削る動作です。「だいく」は腰をかがめて指で弾く所作をしますが、これは大工が墨壺を使う様子を示すものです。墨壺は木材のケガキ線として直線を引く道具で、法隆寺が建立された古代から現代に至るまで重宝されている歴史的な道具の一つです。定規と鉛筆などを使って木材に直線を引こうとして

も、木目の凹凸に阻まれて線が歪んでしまいますが、墨壺を使うと木目に影響されずに直線を引くことができます。まず、猿子と呼ばれる針を、線を引き始めたいところに刺して固定します。続いて本体を猿子から引き離して糸を引き出します。墨壺の糸巻から繰り出される糸が、墨がたまつところを通過することで墨を含んで出でてきます。線を引きたいところで糸を引き出したら、伸ばした糸の真ん中を指先で軽くつまんで本体を木材にあてます。固定できたら、糸をつまんだ指を軽く弾くと糸全体が木材にあたり、墨が木材に転写されるという仕組みです。

また、教祖伝に「十四歳で里帰りされた折には、着物は派手な振袖であるのに、髪は三十女の結う両輪であったから、村人達は、三十振袖。と、私語き合った」とありますが、この両輪という髪型は、江戸時代後半から大正時代にかけて、主に京都や大阪を中心とする上方で結われた既婚女性のヘアースタイルで

図3 両輪の女性『女子風俗化粧秘伝』
(天理図書館蔵品)

す。当時は髪型や化粧、着物を見ると、どの身分か、未婚か既婚か、子どもがいるかいないかが一目瞭然という個人情報全開示の時代でした。天理図書館が所蔵する『女子風俗化粧秘伝』（文化10年刊）では、良家の夫人が振袖姿で立つ姿が描かれているので、まだ14歳という年若い年齢で晴れ着として振袖を着る場合もあったかと思われます。この書物は、顔立ちに合った化粧法や髪型を図解入りで詳細に記述した本で、関東大震災で版木が消失するまで重版を重ねた大ベストセラーでした。櫛は、飾り櫛とブラッシングするお手入れ用の櫛とは別で、スターリング用の櫛は丈夫な黄楊材が多く、種類も多様です。当時のおしゃれグッズも本展でぜひご覧いただきたいと思います。

図4 柄鏡、鏡掛、櫛類 江戸～大正
(天理参考館蔵品)

本展の資料を通して、幕末明治という激動の時代に生きた人々の暮らしに思いを馳せ、同時にこれから時代を歩む私たちの指標の一つとなれば幸いです。次号に続きます。

前回（2025年12月号）は、ダニエル・パリッシュ・キダーによるカトリック文化に内在する「異質性」およびブラジル的カトリック表象とその文化的特性に対する批判的見解について取り上げた。この見解は、ブラジル社会が取り返しのつかない「宿痾」に病んでいるという認識にとどまるものではなかった。むしろキダーは、ブラジルはいまだ生成の途上にあり、いかようにも形づくことが可能であると信じていた。彼は、ブラジルが自立できない要因として教育の欠如と国民の低い識字率を指摘し、⁽¹⁾プロテスタント思想に基づく宗教教育の必要性を説いている。

少年との出会い

キダーは、学校設立に関する具体的な構想を明確には示していないかったものの、問題の所在を明晰に把握したうえで、自らの言説を展開していた。1839年、キダーはブラジル北東部パライバ州のカベデロ港を遊歴中、偶然出会った14歳前後の少年と、次のような会話を交わしている。

キダー：このあたりに学校はあるか。

少年：うん、ある。

キダー：どこにあるのか。

少年：屋敷にある。

キダー：生徒は何人いるのか。

少年：さあ、分からぬ。長椅子が3つ分ほど、いっぱいになるくらいかな。

キダー：君もそこに通っているのか。

少年：いいえ。去年、修了した。

キダー：字は書けるか。

少年：いいえ。読むことも書くこともできない。

キダー：では、学校で何を学んだのか。

少年：何も。

学校を修了した後、その少年は漁師となったが、彼の家族の中で読み書きのできる者は一人もいなかった。しかし、学校に通っていたにもかかわらず読み書きができないという事実にキダーは強い憤りを覚えた。とりわけ、少年が学校で何も学んでいないと語ったことに対して、キダーは次のように述べている。

最後の断言については疑う理由はなかった。しかし、身分の高低を問わず臣民のために、寛大ではあるもののやや誤った政策のもとで政府が整えてきた教育制度に対し、彼らがこのように愚鈍なまでに無関心であるさまを目の当たりにして、私は心を痛めた。⁽³⁾

こうしたキダーの言葉を受けて、ヴァスニ・デ・アルメイダとジョゼ・ネト・ソウザ・ゴメスも、少年が文盲であった点について、19世紀前半におけるブラジル帝国の「不十分な公教育政策」に起因するものであると指摘している。しかし、「不十分な」という評価にとどまらず、管見の限りでは、それは縁故主義的性格を帯びた公教育政策であったとも言える。

ブラジル帝国の公教育政策の性格

当時のブラジルでは、政府による公教育政策が実施されていたものの、その本質は排他的でエリート主義的な性格を有していた。市井の人々の低い識字率は、パトナリスティックな寡

頭支配のもとで、支配体制の維持に資するものとして機能していた。その結果、読み書きは一部の特権階級の子どもたちにのみ許され、政府による公教育政策は、その運用において、実質的にはエリート中心の縁故主義的制度として機能していた。

先に見た少年のように、特権階級に属さない子どもたちが通っていた学校の「屋敷」や、学校に通っていたにもかかわらず何も学んでいなかった理由については、19世紀ブラジルの教育史を研究するシンシア・グレイヴェ・ヴェイガによって、次のように説明されている。

学校を指す「屋敷」とは、今日の学校を想起させるような専用の校舎—教室や職員室、図書館などを備えた建物—を意味するものではなかった。当時のブラジルにおいて学校とは、多くの場合、教師の私宅を指していたのである。しかも、そのような教師の家には教科書すら存在せず、教育環境はきわめて粗末なものであった。ヴェイガは、公教育の推進を阻んでいた要因として、次の3点を挙げている。すなわち、国民の「貧困」「教育の重要性に対する無関心」、そして「教師およびその教授法をめぐる課題」である。⁽⁵⁾

「貧困」と「教育の重要性に対する無関心」は、一体化したものとして理解できる。先に見た少年の場合、彼は特権階級に属さない漁業一家の出身で貧しかったが、政府による教育政策により学校に通学した。しかし、学校に通うことに意義を見出せず、無関心な状態となった結果、読み書きを習得できず、結局何も学ばなかった。これは、漁師として生活する上では、読み書きが必ずしも必要ではなかったためと考えられる。そのため、公教育政策については、実際には市井の人々の現実や意識と、特権階級の国民の意識との間に大きな乖離があった。

ただし、キダーにとって、学校に通っているにもかかわらず読み書きができないという事実は受け入れがたいものであった。彼にとって、学校教育は単なる識字や社会的上昇の手段ではなく、迷信や宗教的桎梏を克服するための基盤として位置づけられていたからである。⁽⁶⁾少年との別れの際、キダーは彼とその家族に読み書きへの関心を促すため、福音冊子を手渡した。キダーにとって、この福音冊子と読み書きへの関心は、ブラジルの「宿痾」に対する象徴的な処方箋としての意味を持っていたに違いない。

[註]

(1) 歴史学者のリリア・シュワルツによれば、少なくとも1870年代までのブラジルでは、国民の約84%が非識字であったと推定されている。

(2) Daniel Parish Kidder. *Sketches of Residence and Travels in Brazil: Embracing Historical and Geographical Notices of the Empire and its Several Provinces*. Vol. 2. London: Wiley & Putnam, 1845, p. 181.

(3) Ibid., p. 182.

(4) Vasni de Almeida, José Neto Sousa Gomes. "Daniel Parish Kidder: sociedade, identidade e cultura nas narrativas de um protestante viajante no século XIX." *PLURA, Revista de Estudos de Religião*, vol. 7, no. 2 (Jul.-Dez. 2016), p. 114.

(5) Cynthia Greive Veiga. "Escola pública para os negros e os pobres no Brasil: uma invenção imperial" *Revista Brasileira de Educação*, vol. 13, no. 39 (Set.-Dez. 2008), p. 513.

(6) Vasni de Almeida, José Neto Sousa Gomes, op. cit., p. 115.

(7) Daniel Parish Kidder, op. cit., p. 182.

第8講:「元の理」と「こふき」

天理大学人文学部教授
岡田 正彦 *Masahiko Okada*

従来の「こふき」本の研究は、特定の写本の書誌的研究や写本の交合、さらには写本の系統や原本を確定するための基礎的な調査を中心としてきた。しかし、初期の書誌的研究を踏まえて体系的な解釈や通訳が試みられてきた原典研究とは違って、こふき本の構造的な読解はほとんどなされていない。

写本の系統や原本を確定する基礎的な研究も不十分な段階ではあるが、今回の講座では、発表者が大学の演習や研究会等で何度も原本を通読してきた、天理図書館所蔵の「神の古記」(明治16年写本)をもとに、写本の原本にさかのぼりながらこふき本の世界の一端を紹介し、天理教教理における「元の理」の位置づけについて考えてみた。

*

いわゆるこふきの写本については、すでに中山正善『こふきの研究』においてその概略が示され、明治14年と16年の写本の翻刻が紹介されている。また、『複元』誌に掲載された、吉川万寿雄「神の古記対照考」(『複元』第15号)は、明治16年の柳井本などを標準本として、各種のこふき話の写本を比較検討しているが、別席台本のように整理された定本ではない。上記の吉川氏の遺稿を掲載するにあたって、編集者は「内容についての釋義は、そのうちに書いてみたいと思つてゐる」と述べている。しかし、これらの書誌的な研究はいまだその途上であり、確定された定本をもとにこふき話の概要をまとめ、内容の解説や細部の表現の解釈を試みるのは、まだしばらく先のことになるだろう。

とはいっても、こふき本のヴァリエーションは細部の表現などの差異が主であって、全体的な話のプロットや構成に極端な違いは見られない。とくに明治16年本以降の写本に関しては、ある程度の概要をまとめて、こふき話の全体的なイメージを掴むことは可能であろう。

今回の発表では、天理図書館所蔵の「神の古記」(明治16年写本)をもとにして、写本として残されたこふき話の概略について解説した。もちろん、この写本は定本ではなく多様な写本の1つに過ぎないが、教祖ご在世当時の教えの説き分けの一端に触れ、教祖を通して伝えられた親神の教えに近づく機会にしたいと考えた。

この写本に関しては、すでに上野利夫氏による翻刻が『ビアリア』第43号(1969)に掲載されている。上野氏によると作者は不詳であるが、「交合資料として注目すべき価値あるもの」であることは確かなようだ(112頁)。「神最初之由来」、「神之古記」、「彼岸之訳」、「甘露台一条」からなるこの資料のうち、「神最初之由来」と「神之古記」が、いわゆるこふき本にあたる。当日は、原本の写真を投影しながらこふき話の内容と構成を紹介し、教祖のお言葉をより身近に感じられるように心がけた。

くずし字で記されたこの時期の直筆資料は、読み慣れるまでに時間がかかる。しかし、その一方で活字化された資料よ

り以上に、その筆致などから当時の人々の教理理解を推量し、教祖のお言葉をより身近に感じることができるだろう。

こふきの写本は、とても丁寧に書写されている場合が多く、決して読みにくい資料ではない。こふきに関心をもつ人々に、もう一步踏み込んだ研究の世界に触れていただくよい機会になつたと思う。

*

また、本資料はしばしば「前の部」や「この訳左に」といった表記を使用し、全体をいくつかのセクションに分けている。なかでも、いわゆる「泥海古記」と称された元はじまりの話のセクションは、こふき本の主要な部分ではあるが、この創世の説話はこふきと称された教説のすべてではなく、むしろ「かしもの・かりもの」や「ほこり」、「陽気ぐらし」といった教理をより説得力のあるかたちで説明するために、説かれているような構造になっている。元はじまりの話に説かれる人間・世界の創造と、あらゆる生命を育む親神の守護を前提として、はじめて「かしもの・かりもの」や「ほこり」、「陽気ぐらし」といった教えは、具体的にひとり一人の運命を転換し、世界をあるべき姿に変えていく原動力となりえるのである。

とくに「前の部」と称される立教の経緯との関連性に目を向けるとき、「こふき話」は創世説話というよりは、立教の意義と教祖の立場を明確にし、救済の手段としての「かぐらづとめ」の意義をより具体的に説いていることは明らかだろう。こふき本の原本と向き合いながら、その内容を検討するとき、誰もが同じような印象を受けるのではないだろうか。

当日は、天理図書館所蔵「神の古記」(明治16年写本)の基本的なプロットと構成を原文に即して紹介しながら、いわゆる「こふき本」の概要を解説して、「こふき話」=「元はじまりの話」ではなく、かなり広い範囲の教説がそこに説かれていることを具体的に説明した。

*

教祖が取次ぎに仕込まれたこふき話の全体像を俯瞰しながら、「元の理／元はじまりの話」をこふきに位置づけるとき、明らかに元はじまりの話は、たんなる神話や創世説話とは一線を画する「話」であり、その内容の解釈を教理の全体像と切り離して論じることは難しいことがよく分かる。

とはいっても、「元の理」を「つとめ／たすけの理話」として限定的に解釈するだけではなく、その豊饒な意味世界を広く探求する視座も必要だろう。現存するこふきの写本に直接アクセスすることによって、それぞれにその深遠な神の言葉の沃野に足を踏み入れてもらいたいものである。そのためには、写真版を含む直筆原本に触れることが欠かせない。

この次はぜひ、『複元』誌の輪読やこふき本の講読といった研究会を企画してもらいたいものである。講演会とはまた違った、興味深い議論ができる場になるのではないだろうか。

第383回研究報告会（2025年12月22日）

「天理教対人援助論の確立の必要性について一天理人間学と天理教人間学の研究成果をてがかりに—」

種村 理太郎（天理大学人文学部准教授）

天理教社会福祉論における理論的枠組の構築が十分ではないという課題と教内の対人援助領域の学際的な交流が十分に進んでいないという現状に対して、天理教対人援助論という共通基盤の確立に向けた検討を、天理人間学と天理教人間学の先行研究を手掛かりに報告した。特に各実践領域から天理

教教義や教祖のひながたなどにその思想的根拠を求める方向性と、天理教教義や教祖のひながたなどに含まれる対人関係や対人援助の視点に接点を見出せることから、天理教対人関係論、天理教対人援助論、天理教の考えに基づいた各実践領域の三層に暫定的に整理できることを提示した。このような枠組を提示することで、教祖のひながたの中にある対人関係の心得を出発点とした対人援助論へとつながる道筋と、各領域で培ってきた実践知から見出されてきた各援助論との中間点として天理教対人援助論が中継的な役割を果たす可能性が考えられる。

2025年度おやさと研究所 公開教學講座 「元の理」の学術的研究とその新しい展開を求めて

第1回	4月25日（金）「元の理」研究入門	金子昭 研究員（終了）
第2回	5月25日（日）「元の理」の人種理論・平等思想	中西光一 研究員（終了）
第3回	6月25日（水）「元の理」の社会思想	澤井治郎 研究員（終了）
第4回	7月25日（金）「元の理」と布教伝道	尾上貴行 研究員（終了）
第5回	8月25日（月）「元の理」と福祉思想	八木三郎 元研究員（終了）
第6回	9月25日（木）「元の理」の見立て・象徴論	澤井真 研究員（終了）
第7回	10月25日（土）「元の理」と天理教学	島田勝巳 研究員（終了）
第8回	11月25日（火）「元の理」と「こふき」	岡田正彦 研究員（終了）
第9回	12月25日（木）「元の理」と異文化理解	森洋明 研究員（終了）
第10回	1月25日（日）「元の理」の人間学／人類学	井上昭洋 所長
第11回	2月25日（水）「元の理」のジェンダー論	堀内みどり 主任
第12回	3月25日（水）「元の理」の学際的研究の可能性	佐藤孝則 元研究員、他

(2025年度「教学と現代」)

日時：毎月25日 13:00～15:00**会場：天理大学研究棟3階 第1会議室**※但し、第10回（1月）、第11回（2月）はふるさと会館大ホール

事前申し込みは不要です。
直接会場にお越しください。

グローカル天理
第27巻 第2号（通巻314号）

2026年（令和8年）2月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University発行者 井上昭洋
編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所（HP）

印刷 天理時報社
Printed in Japan